

草双紙の洒落言葉 (三)

——山東京伝の場合——

安永四年(一七七五)恋川春町画作『金々先生栄花夢』(鱗形屋板)の刊行をきっかけに、武家階級の新規参入作者によって成された、いわゆる「黄表紙」の時代において、職業作家として新しい草双紙の時流に乗った人物の一人に山東京伝がいる。京伝は、穿ちやパロディといった黄表紙を特徴づける要素を作中に体现した一方で、従来の草双紙が伝統的に用いた趣向を引き継ぎ、素朴な面白味を読者に提供した草双紙作者である。¹⁾京伝の作品の中には「赤本」の語が多く見られ、それらは今日の文学史上の区分でいうと、黄表紙以前の初期草双紙全体を指すものと解せる。寛政五年(一七九三)『臯下旬虫干曾我』(鶴屋板)に「赤木作の赤本は古風を慕う作者の捻」とあるように、伝統的な初期草双紙風の事物を作中に取り入れるのを好んだ。

松原哲子

天明二年(一七八二)『御存商売物』(鶴屋板)は、大田南畝の黄表紙評判記『岡目八目』で「青本惣巻軸」と評価された、京伝にとって出世作といえる作品で、安永七年(一七七八)刊『辞闘戦新根』(恋川春町画作、鱗形屋板)に着想を得て、出版物の盛衰を描いた異類物である。

『辞闘戦新根』では、鱗形屋板の草双紙に多用された言語遊戯の語句たちが化け物として擬人化され、板元の鱗形屋や彫師・摺師といった出版側の人間たちが自分たちを大切にしないことに不満を抱き、嫌がらせをする。最終的には、草双紙に先行して鱗形屋から刊行された唐紙表紙たちが土蔵の中から解放され、言葉遊びの化け物たちを懲らしめるが、洒落言葉が無くては草双紙の趣向は成り立たないと、特別に許される。

『御存商売物』では、作中冒頭、上方出身江戸在住の八文字屋本と行成表紙の下り絵本が登場し、江戸での地本の隆盛を妬み、青本（文学史上の分類でいうと「黄表紙」）や洒落本を陥れようと企む。そして、その方法として、青本と同じ草双紙仲間の赤本と黒本が近年人気薄になっていることに目をつけ、二人を屋敷に招き、赤本・黒本の不繁盛の原因が青本にあると、敵愾心を抱くようけしかける。赤本と黒本は、まんまと上方下りの二人の口車に乗せられ、青本を嫉み、嫌がらせを試みる。最終的には、『唐詩選』や『源氏物語』といった、格上の書物たちに論されて騒動は収められる。上方下りの二人は、腰張りや屏風の下張りにされて、その姿を失うが、赤本と黒本は綴じ直された後で元通りに繁盛する。

『辞闘戦新根』では、板元とその仕事仲間・鱗形屋板草双紙に多用された洒落言葉・鱗形屋板の唐紙表紙の三者等を対比させている。作中、唐紙表紙については享保年中に刊行され、現在（安永七年時点）は土蔵に押し込められている、時代遅れになってしまった登場人物であることが明示されている。それに対し、洒落言葉については、草双紙に登場以来読者によく知られた趣向で、「草双紙の氏神、中興の開山」であると、リーダー格の「大木の切り口太いの根」に大いに顕示させる一方で、板元をはじめとする人

間たちに憤っている理由は、自分たちを尊敬してくれない、待遇が悪い、と言うだけで、具体的な事情を明らかにしていない。

そこで、擬人化された洒落言葉に対する作者春町の捉え方を探る為に、文芸作品における使用状況を調査した。結果、これらは市井の流行語ではなく、鳥居清満や鳥居清経が画工を務めた時期の鱗形屋板草双紙に用例が集中するので、宝暦期後半から安永期までの鱗形屋板で使用された洒落言葉であると想定されることが判明した。『辞闘戦新根』に登場する洒落言葉の化け物たちは、安永七年当時の流行語としてではなく、伝統的な鱗形屋板草双紙を象徴するものと描かれているといえる。よって、タイトルにも示されている本作の「新しさ」とは、洒落言葉自体が新しい市井の流行語であったことや、市井の流行を作品に取り入れられるという趣向の新しさを示したのではなく、従来の草双紙とは異なる方法で洒落言葉を作中に用いた、作品性の斬新さを示すものであったと考えられる。

一方、『御存商売物』は、『辞闘戦新根』では描かれなかった文運東漸の時勢を捉えると共に、草双紙の盛衰を穿つことに眼目のある作品となっている。草双紙の盛衰とは、安永四年『金々先生栄花夢』刊行以来の新しいタイプの草双紙（黄表紙）の隆盛と、従来の伝統的な草双紙（赤本・黒

本青本)の衰退を意味する。これは、『辞闘戦新根』にははっきりとは描かれなかった要素である。

京伝が『御存商売物』の中で、人気薄になってしまった、時代遅れの赤本および黒本(文学史上の分類でいうと「黒本青本」)は、どのように描いているのかを整理してみる。まず、以下に示すのは、下り絵本が赤本と黒本を屋敷に招き、もてなす場面である。

くだりゑほんはあるとき赤ほんくろほんをまねきた
ひのみそつに四方のあかをふるまひ あかほんはちつ
とのむと あかくなるゆへ ひきのやのどら印いだし
(二丁表)

下り絵本は「鯛のみそず」と「四方のあか」でもてなし、酒の弱い赤本には「ひきの屋のどら印(どら焼き)」を出す。これらは下り絵本が考えた、赤本や黒本をもてなすにふさわしい酒肴・酒・菓子ということになる。

つづいて、吉原で、青本に嫌がらせをする機会を窺う黒本の描写である。

くろほんはしよせんたひぼくのきりくちくらひでは

あをほんにけちをつけることはおもひもよらずとす
こしとうせひをやるきになりまつくろくろじたて
あかほんとつれだち

黒本は「大木の切り口」ぐらいでは青本への嫌がらせにならないと考えている。「少し当世をやる気になり」とあることから、真つ黒黒仕立ての服装に比して「大木の切り口」は当世風でない、つまりは目新しさのない、ありふれたものであることを指す。

『御存商売物』に登場する「鯛のみそず」「四方のあか」「大木の切り口」は、『辞闘戦新根』で出版側の人間たちに嫌がらせをする化け物として登場している。一見、これらの語句は、『辞闘戦新根』での描かれ方をそのまま踏襲しているようにもみえるが、両作品には、これらの位置づけに違いはあるのだろうか。

これらの語句について、実際の草双紙における使用状況を踏まえることによって、『辞闘戦新根』におけるあり方を整理すると、以下の通りである。

① 「四方のあか」は酒の銘を指し、美味しいものの一例として、褒美として与えられたり、労働後に欲するものとして挙げられる。「鯛のみそず」は「四方

のあか」と一緒に供される酒肴。黒本青本では様々な酒肴が登場しており、「鯛のみそず」はその一例にすぎず、特に目立つ存在ではない。草双紙における用例の変遷は、初め酒の銘のみを挙げたものが、次第に酒肴を取り合わせるようになっていったという流れがみえる。「四方のあか」に酒肴を取り合わせて作中に挙げる例は、初期草双紙においては用例の多くが鱗形屋板のものである。

②

草双紙における、「四方のあか」と取り合わせる酒肴が「鯛のみそず」になっている用例の、管見の限りでの初出は、安永四年刊『大福／富突始』（鳥居清経画、鱗形屋）の「このあとでは御きちれいのたいのみそづでよものあかをきこしめしませう」（十丁表）である。明和四年（一七六七）刊行の大田南畝の『寝惚先生文集』に「読絵草紙二種」と題した狂詩の中に「鯛味噌津四方酒」の語がみえることから、『大福／富突始』に先行する例があるものと思定されるが、未見。いずれにせよ、「四方のあか」と「鯛のみそず」を一对とする形は、鱗形屋板初期草双紙にみえる複数の組み合わせのひとつであったものと考えられる。

③

春町が『辞闘戦新根』で「鯛のみそず」「四方のあか」の組み合わせを採用したのは大田南畝の『寝惚先生文集』の影響だが、その他仲間の化け物として採用されたものについては、安永四年以降に刊行された鱗形屋板草双紙に直接取材している可能性がある。

「ならずの森の尾長鳥」は『辞闘戦新根』に化け物仲間の一人として登場するが、「ならずの森の・」という洒落言葉は、京都下鴨神社の境内にある「糺の森」をもじった表現で、元来上方で使用されたものが江戸に下ったと想定される。用例数は多くないものの、江戸では草双紙に限らず使用されており、鱗形屋板の初期草双紙に限られて使用された洒落ではない。注目されるのは、安永四年刊『大福／富突始』および安永五年刊『風流／上下の番附』（ともに鳥居清経画、鱗形屋板）に用例が確認されることである。鱗形屋板の初期草双紙における用例数が多いとはいえない言葉が、安永四年以降の伝統的な鱗形屋板に確認されるという現象は、『辞闘戦新根』執筆にあたって、作者春町が、伝統的な鱗形屋板の中でも、刊行時期の新しい作品を参照した可能性を探る材料となる。

④ 「大木の切り口（太いの根）」は、黄表紙においては、

時代遅れな言葉として、赤本や黒本青本と結びつく洒落として散見される言葉だが、管見の限り、初期草双紙に用例は存在せず、本来は誤った形である。正しくは「大木の生え際太いの根」で、黄表紙以前の草双紙においては、鱗形屋板に限って用例が確認される。鱗形屋板の伝統的な流れに位置する用例の下限は安永七年刊『熊坂伝記』、同年刊『夢中海原』である。また、安永六年（『金父母』）や、安永四年（『三人楨者真敵打』）にも「大木の生え際太いの根」の語がみえる。

黄表紙で「大木の切り口」の用例が定着したのは、朋誠堂喜三二（安永六年『南陀羅法師柿種』）「うぬふるいせりふだか大ほくのきり口ふといのねときた」、喜三二作、春町画）もしくは恋川春町の誤用を踏襲したためと推定される。

一方、京伝が『御存商売物』で描いた世界は、黄表紙と赤本・黒本の対立関係という、いわば草双紙新旧対決という構図を明確に提示しているものの、細かい描写については、曖昧な点が残る。

まず、作者京伝が草双紙の構想について相談するために

訪問した相手は鶴屋喜右衛門だが、作中登場する様々な出版物たちは、特に鶴屋と結びつくものではなく、地本屋全般が扱ったものである。草双紙についても、特に鶴屋板と結びつくような描写は見受けられない。先に挙げた言語遊戯の語句の使用は、鶴屋板ではなく鱗形屋板草双紙との関係を思わせるが、『辞闘戦新根』のような鱗形屋に特化した描写は一切無い。先述のように、言語遊戯の語句を吹き寄せ的に多用するという手法は宝暦期末以降鱗形屋板草双紙に出現した新しい傾向であったと推定される。しかし、宝暦十一年生まれの京伝にとって、この変化や鱗形屋との強い結びつきに対する認識が無かったのか、『御存商売物』では、言語遊戯の語句を時代遅れで不繁盛になってしまった赤本・黒本と結び付けているだけである。

先述の通り、「大木の切り口太いの根」は本来無かった表現だが、京伝は本作で誤った語形を用いている。さらに、この誤った形をベースとして「太鼓持ちの切り口むごいの根だ」（天明四年（一七八四）『不案配即席料理』、鶴屋板）や「牛の角の切り口太いの根付ときたは」（寛政四年（一七九二）『昔々／桃太郎発端話説』、葦屋板）など、多くの地口を作中に配している。これらの地口はその時々で表現は異なるものの、用いられる場面や、後に続く文言は、おおかた伝統的な鱗形屋板草双紙でのあり方に準じてい

る。言語遊戯の語句は、黄表紙以前の草双紙の古風で素材な面白味を作中に演出することを好む京伝にとつて、使い勝手のよい趣向の材となつたものと考えられる。

『昔々／桃太郎発端話説』は舌切雀の物語に、実方朝臣が雀になつた話や桃太郎の物語を綯い交ぜにした作品となつているが、先掲の例以外にも、以下に示すような、『辞闘戦新根』に由来すると思われる洒落言葉、またはその地口が取り入れられている。

こうはらがへりま大こんときてはふと印といわれてもあとへもさきへもゆくことはならずのもりのみそ

さざい(二丁裏)

なんぞあげましとうはござりますれどあづまのはての山がときておりますればひきのやのどらやきさつまいもよものたきすいといふばしよもなしのきりくちといふせんさくさ(三丁表)

ほうかしのこがたなではないがのみこみやまならはやうつゝらをもらうてかへりましよ(十丁表)

てんとおもいつゝらだなんでもこのうちのたからをせしめうるしとで、どらやきさつまいものくひあきをしませう(十丁裏)

そんならなんでもいわとかぐらのくろどんとでかけずはならずのもりの大てんぐ

なんにもまつくろすることはねへ ほうかしのこがたなざいくではねへ(十三丁表)

『御存商売物』の十年後に刊行された『昔々／桃太郎発端話説』に、『辞闘戦新根』の影響が明確にみとめられるといふことは、『御存商売物』も当然同様のことがあてはまるといえる。

ただし、京伝の、これら鱗形屋板草双紙と結びつく洒落言葉に対する興味や認識は、大田南畝や恋川春町のそれとは異なつていたものと考えられる。洒落言葉の出自を明らかにしたり、草双紙界の現状を穿つ材料として利用するよりにパロディ化することによつて生じる面白味を、読者に提供することに京伝の興味があつたものと考えられる。京伝の方法は後に続いた作者に踏襲され、これらの洒落言葉の誤つた語形や不正確な位置づけが、まことしやかに継承されていくことにつながつた一因になつたものと想像される。

注

(一) 拙稿『「菊寿草」考』(『江戸文学』第三十五号、平成十八年十一月、ペリかん社) 参照。

(2) 他に、草双紙特有の洒落言葉ではなく、市井における流行語であった「とんだ茶釜」が擬人化され、登場している。

「とんだ茶釜」は笠森お仙評判と明和七年のお仙の出走騒動に起因した流行語で、作中、人間たちを助けようと、土蔵に閉じ込められた唐紙表紙に助けを求め。

(3) 拙稿「草双紙における流行語の位置」〔近世文藝〕第六十八号、平成十年六月 参照。

(4) 『江戸の戯作絵本(一)』(現代教養文庫一〇三七、昭和五十五年、社会思想社)、所収の本作解題・解説では、化け物たちは「当時江戸市中でさかんに使われた新しい流行語」で、「鱗形屋の古い出版物のなかの主人公たちと、草双紙に新しく登場した当世語という一見全く異質なものを、画工・彫師・摺師・版元など当時の出版に必要な人間たちを媒介にして対立させてみた新工夫」であると
する。

(5) 注3に同じ。

(6) 拙稿「草双紙の洒落言葉(一) ―ならずの森の尾長鳥―」〔実践国文学〕第九十号、平成二十八年十月 参照。なお、『大福／富突始』については、実践女子大学文芸資料研究所『年報』第三十六号(平成二十九年三月)に、『風流／上下の番附』については、『安永期黄表紙資料集』(平成二十八年度國學院大學文学部共同研究報告書)中村正

明編、平成二十九年三月)に、それぞれ資料紹介をした。
参照されたい。

(7) 注3に同じ。

(8) 拙稿「『菊寿草』考」参照。

(まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師

実践女子大学大学院博士課程

平成十四年度単位取得満期退学

博士(文学)